

「継続と変化」を思考概念とした小学校人権学習 —小学校社会科6学年「江戸の社会の変化と人々」を事例として—

和田 幸司* 山内 敏男** 小林 智美***
岩本 剛**** 長川 智彦***** 田村 由宏*****

要旨

本稿は、「継続と変化」を思考概念として開発した小学校6学年社会科歴史単元「江戸の社会の変化と人々」の授業開発の有用性を明らかにする。近世における身分成立と差別強化を一元的に捉えるのではなく、18世紀の転換期における社会的背景をもとに差別を把握すること、政治的・制度的に編成された近世身分制で完結してきた従来型の授業実践ではなく、政治的・制度的な編成を前提としながらも社会動向を踏まえた近世の体系的な授業開発を行うことをねらいとしている。

単元の構成原理としては、P.Seixasらの諸論を紹介した星瑞希らの研究を参考に、第1段階（状況の把握、「差別」の発見）、第2段階（属性への「差別」にかかわる背景、条件、意図の理解）、第3段階（継続と変化の把握、歴史的意義の説明）という三段階を設定した。

成果としては、芸能に携わる人々を事例として、歴史的な視点から児童に社会の構造や文化の変遷を理解することを促し、一定の根拠を与え身分差別を成り立たせていた諸観念（「異種観念」「浄穢観念」）を批判的に思考しながら、現代社会とも関連付けて差別を解消するための手がかりを提供できた。また、差別の歴史を学ぶことで、私たちがどのように差別に向き合うべきかについての自己反省を促すことになる点を明らかにした。

キーワード：人権学習、歴史学習、芸能、歌舞伎、浄穢観念

1. はじめに

筆者らは、近世身分学習の課題を明らかにし、「みなす」差別と向き合い、看破する児童・生徒の育成を目指す授業開発を行ってきた¹。我々の研究経過については別稿²を参照いただくとして、なぜ、我々が「みなす」差別と「属性」による差別との関連付けを図り、人権教育としての社会科授業開発に注力しているのかをここで明らかにしておきたい。

筆者は被差別寺院史研究（部落寺院史研究）を専門領域とし、「かわた」村民衆と浄土真宗との関係性、門徒の組織や思想、行動について明らかにしてきた³。そして、「かわた」村民衆の信仰を近世国家に積極的に位置付け、世代間で継承される身分を宗教的に克服していこうとする民衆たちの身分上昇志向を明らかにしている⁴。そうした考証の途上で、被差別寺院の本末関係が「種姓」のひとつとして機能し、本末帳の別帳化が社会的差別を支える性質を有していることから、被差別寺院の顕著な上寺を取り除こうとする身分上昇の動きを明らかにした⁵。さらに、その被差別寺院の顕著な上寺自身も「穢寺」として社会的差別を受けるようになることから、近代になり寺基の移転などを行っていく状況を先行研究も踏まえながら明らかにしている⁶。

ここで明らかとなったのは、時代の転換期における忌避意識を基にした「みなす」差別・「関連する」差別の残存である。深谷克己氏の言葉を借りるならば⁷、社会的にも政治的にも「平均」「平等」への「欲求」が徐々に高揚していく時期において、「種姓」的事象を排除、つまり、「みなす」差別・「関連する」差別の記号となり得る事象を忌避することで、時代を超えて差別が残存していく。

* 姫路大学 教育学部 教授

** 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授

*** 姫路市立大塩小学校 教諭

**** 相生市立中央小学校 教諭

***** 神戸大学附属小学校 教諭

***** 姫路市立花田小学校 教頭

このような歴史状況を鑑みた場合、時代転換期という点において、「アフターコロナ」「ポストコロナ」といわれる現在と近世末期の状況は非常に近い位置にあると思われる。2020年1月にパンデミックとしてWHOにより宣言されたCOVID-19の流行以降、私たちは「VUCA」(Volatility不安定性・変動性, Uncertainty不確実性, Complexity複雑性, Ambiguity曖昧性)時代に生きているとされる。教育再生実行会議第12次提言「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について」においては、一人一人の多様な幸せとともに社会全体の幸せでもあるウェルビーイング(Well-being)の理念の実現を目指すことが重要であることが指摘された⁸。時代の転換点に生きていると考えているのは筆者らだけではないだろう。

以上、我々が「みなす」差別と「属性」による差別との関連付けを図り、人権教育としての社会科授業開発に注力している歴史的背景について述べた⁹。

なお、本研究は令和4年12月6日、姫路大学研究倫理委員会（承認番号2022-08）にて承認を得ている。

2. 授業開発の原理と研究方法

(1) 授業構想に際しての歴史研究の整理

本稿で取り上げる「役者村」と呼ばれる芸能者集団の成立と発展、その歴史的意義については前稿¹⁰で明示してきたが、その概要を以下に再論しておく。

17世紀初頭に誕生した歌舞伎は、幕府の禁制にもかかわらず本格的演劇として発展する。三都を中心に元禄歌舞伎として完成する一方、地方巡業に活路を見出した役者たちによって、地方の歌舞伎も発展していく。播磨地域では「播州歌舞伎」として近世から近代へと発展する。この「播州歌舞伎」の原点が、近世播磨国において「役者村」と呼ばれた加西郡東高室村の「高室芝居」である。役者村の多くは中世からの芸能民の系譜をひくとの由緒を伝えることが多いが、「高室芝居」も例外ではない。東高室村は近世において陰陽師

として土御門家の支配を受けている。延享元年(1744)、「高崎播磨」という陰陽師が東高室村に存在し、陰陽師触頭として播州以西33ヶ国の易道師として許可を得ていたと伝える。

文政8年(1825)の見立番付「諸国芝居繁栄数望¹¹⁾」によると、江戸・大坂の大芝居の格付けのなかに、行事として「新興舞」の肩書きと共に「高室芝居」が明記されており、18世紀後半から19世紀にかけて全国でその名前が知られるようになったと推察できる。教材化に際しては地域史料が必須となるが、村内大歳神社の享和2年(1802)の手水石銘に役者たちの名前が残されている。

さて、この芸能者集団の身分であるが、近年の研究では福岡藩において、いわゆる「解放令」の対象が「穢多」「非人」「寺中(芸能者集団)」であった点、天保5年(1834)に「寺中」を皮多同様に取り扱うように指示した史料が公開されたことから、「寺中」が「穢多」身分に近い位置であったことが明らかにされている¹²⁾。さらに、柳田國男が「毛坊主考」で指摘したように、東高室村は志久(夙)と呼ばれていたという¹³⁾。夙とは近世においては「平人」と「穢多」の中間に位置する身分とされ、交際は禁じられなかったが結婚については「穢多」身分同様の差別を受け、現在においても完全に払拭されてはいない。また、東高室村は俗謡の歌詞中で「東高室下がりでなけりゃ、ついて行きたい三代吉に」と伝えられる。東高室の人気役者「三代吉」を指すと考えられるが、ここには東高室への卑賤視が理解できる。芸能者集団の職分への社会的差別があったのである。

(2) 授業構想による教育的アプローチの研究視角

畑中敏之氏は身分と身分差別を峻別して捉え、身分差別の内容や構造を図式化している¹⁴⁾。以下に図1を示す。

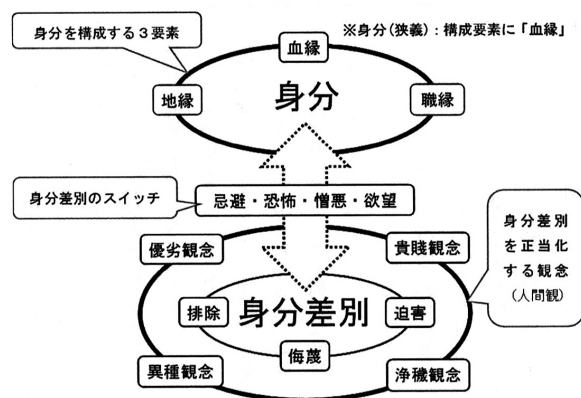


図1 身分と身分差別の構造

氏は身分差別を考える際には、まず差別(行為・構造)と被差別(状況・実態)に分けて捉えることが重要であるとする。身分をひとくくりにして何らかの「ちがひ」を「口実」にしてなされる不当な差別は「侮蔑」「排除」「迫害」に整理できるとしている。

そして、一定の根拠を与えて身分差別を成り立たせているのが「異種観念」「浄穢観念」「貴賤観念」「優劣観念」の人間観であると規定している。こうした諸観念が直ちに差別を起動させているわけではなく、「忌避」「恐怖」「憎悪」「欲望」の感情が差別のスイッチ的な役割を果たすと述べている。

筆者らはこの図式化の詳細な点については議論を深めていく必要があると認識しているが¹⁵⁾、この差別の構造図式は近世だけでなく、現在にも通じる概念図であると評価している。これを教育に援用する場合、「差別のスイッチを働かせない教育」「諸観念(人間観)に対する批判的視点を鍛える教育」が必要であると考えている(図2参照)。この2点へのアプローチを行う教育が推進されるならば、「属性」が身分差別に移行することなく、多様性として個性が尊重され、公正で包摂的な持続可能な社会を志向していくために、人権としての学びのレリバンスが構築できると考える。

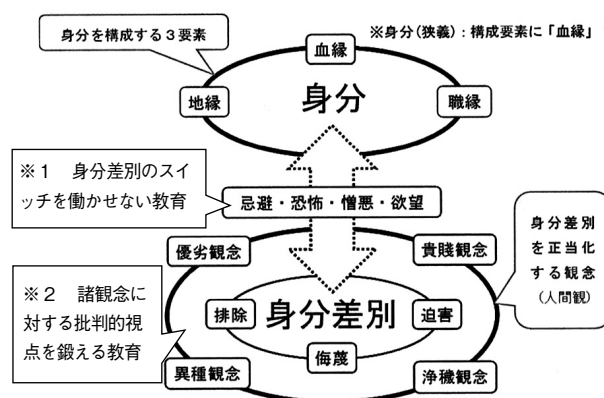


図2 身分と身分差別の構造

さて、本授業構想がアプローチするのは、※2「諸観念に対する批判的視点を鍛える教育」である。芸能者集団が被差別身分におかれたのは前述の通りであるが、中世においては、人知の及ばぬ神仏の世界と人々の世界の境と認識されていた河原で、市が立ち芸能が行われるようになる。こうした歴史状況のなかで、芸能を行う人々を「異種観念」と「浄穢観念」によって価値づけを行い、身分差別を正当化する人間観が生まれていく。こうした点に「継続と変化」の思考概念によって、児童に検討を行わせていくのが本授業開発の主旨である。

ここで、「継続と変化」の思考概念について、星瑞希らの論考¹⁶⁾によって、補説しておく。「継続と変化」の思考概念はブリティッシュコロンビア大学の歴史教育研究者セイシャス(P.Seixas)とトロント大学のコリヤー(J.Colyer)によって2006年に開始したプロジェクト「歴史的思考プロジェクト」(The Historical Thinking Project: 以下HTPと略記)における思考概念である。

HTPでは、歴史的思考を構成する6つの概念が設定されている。6つの概念とは、①「一次資料の証拠」、②「原因と結果」、③「歴史上の他者の見解」、④「継続と変化」、⑤「歴史的意義」、⑥「倫理的側面」である。「継続と変化」は過去と現代を比較することで過去の探究と現代の探究を繋げる役割を果たしている。具体的には過去から今にかけて何が変化し、何が継続しているのかを考えることで、教室と社会をつなぎ、現代社会における差別事象を看破する力を獲得できると考える。

3. 単元の実際

(1) 単元名 「江戸の社会の変化と人々」

(2) 単元の目標

①知識・技能

○江戸幕府の参勤交代や鎖国などの政策、身分制度などについて、地図・絵図・年表・文化財・人物のエピソード・絵巻・想像図などの資料を通して、情報を適切に調べ、武士による政治が安定したことを理解する。

②思考力・判断力・表現力等

○地図・絵図・年表・文化財・人物のエピソード・絵巻・想像図などの資料から読み取ったことを関連付けたり総合したりする活動を通して、江戸幕府の政策の意図や社会の様

子を現在とのつながりを考えながら説明する。

③主体的に学習に取り組む態度

○江戸幕府の政策や当時の世の中の様子に関心をもち、政治を安定させる過程での問題点を粘り強く調べたり考えたりする活動を通して、これからのよりよい社会の在り方について追究しようとする。

(3) 指導計画

第1時 「力をつける町人」

第2時 「芸能に携わる人々と仕事」

第3時 「芸能に携わる人々と差別」

第4時 「継続と変化の視点から考えよう」

(4) 学習の流れ

【第1時】

① 本時の目標

○江戸時代の町人のくらしの変化について調べ、産業や交易の発展とともに江戸や大阪などの町が発展し、町人がどのように力をつけていったかを理解する。

② 展開

児童の活動	指導上の留意点 (◇評価)	備考・資料
1 町の人々のくらしを想起する。 ・町には町人と武士が住んでいる ・町はにぎやかで活気がある	○「熙代勝覧」を提示し、町に住む人々の様子を捉えさせる活動を通して、本時のめあてにつなげる。	<u>資料1</u> 熙代勝覧（出典：小澤弘・小林忠『熙代勝覧の日本橋』） <u>資料2</u> 日本橋周辺の様子（出典：教科書資料）
なぜ、町に活気があるのだろう		
2 町に活気がある理由を考える。 ・町に活気がある理由を予想する ・教科書の資料・本文から町に活気がある理由を説明する	○「熙代勝覧」と「日本橋周辺の様子」で、活気がある部分を見つけさせ、様々なものが売買されていることや、多くの人々が生活している点や、旅行する人がいる点などを確認させる。 ○なぜ、活気があるのかを考えさせることで、人々のくらしが豊かになってきたことに気づかせる。 ○教科書の3つの資料から、幕府も藩も特産物を作る産業に力を入れたこと、百姓が工夫して農業を行い、様々なものが町人によって売買されるようになったこと、人口が増えて必要な物をたくさん作って売ることができたこと、交通が発達して人や物の移動が便利になったことなどを確認させる。 ○教科書の本文から、経済力では、大名をしのぐ大商人も現れたことを確認させる。	<u>資料3</u> 江戸時代の主な特産物（出典：教科書資料） <u>資料4</u> 江戸の町人の人口の変化（出典：教科書資料） <u>資料5</u> 江戸のおもな交通（出典：教科書資料）
3 町の人々の生活はどのように変化したのかまとめる。	◇資料から、経済力が向上し、くらしが豊かになったことを読み取り、ノートにまとめることができたか。	
陸路や航路の発達などに伴って、町人は商売で経済力をつけ、町の運営に中心的に関わるようになった		

【第2時】

① 本時の目標

○芸能に携わる人々のくらしについて、絵図や地図などの資料をもとに調べ、芸能に携わる人々は、巡業をしながら芸能を披露していたこと、また、くらしの中で差別を受けていたことを理解する。

② 展 開

児童の活動	指導上の留意点 (◇評価)	備考・資料
<p>1 芸能(歌舞伎)について話し合う。</p> <p>○どうして、歌舞伎役者の浮世絵がかかれたのでしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌舞伎は人気があった ・注目される役者がいた 	<p>○江戸時代に広がった文化としての浮世絵をもとに歌舞伎を取り上げることで、当時の人々のくらしの中に「芸能」が根づいていたことに気づかせ、本時のめあてにつなげる。</p>	<p><u>資料 6</u> 歌舞伎役者の浮世絵 (出典：教科書資料)</p>
芸能に携わる人々は、どのようなくらしをしていたのだろう		
<p>2 江戸時代の芸能の広がり調べ。</p> <p>(1) 芝居小屋の様子調べ。</p> <p>○歌舞伎を演じる芝居小屋は、どのような様子でしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの人が見物している <p>(2) 歌舞伎が演じられていた場所調べ</p> <p>○歌舞伎はどこで演じられていたのでしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・江戸や大坂など全国の町で演じられていた <p>○どうして、村にも芸能が広まったのでしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町から役者が来て技術を伝えた 	<p>○芝居小屋の内と外の浮世絵を示し、多くの人で賑わっていたこと、「座」をつくって江戸の町を中心に演じられていたことに気づかせる。</p> <p>○歌舞伎の番付をもとに、大関や関脇の中の「江戸」「大坂」「京」という表現に着目させ、人気のあった歌舞伎座が江戸や大阪を中心とした町にあったことに気づかせる。</p> <p>○村にも歌舞伎が広まった理由を問うことで、歌舞伎が町や村を問わず全国的に展開された理由を共有させる。</p>	<p><u>資料 7</u> 歌舞伎の様子 (出典：教科書資料)</p> <p><u>資料 8</u> 諸国芝居繁栄数望 (出典：『加西市史』第6巻)</p> <p><u>資料 9</u> 農村舞台の分布 (出典：角田一郎『農村舞台と播州歌舞伎』)</p> <p><u>資料10</u> 農村舞台写真 (出典：神戸市HP)</p> <p><u>資料11</u> 村で歌舞伎が広まった言い伝え (出典：『加西郡誌』)</p>
<p>3 芸能に携わる人々の生活を調べ。</p> <p>○芸能に携わる人がくらすC村とはどのような村だったのでしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・役者、石屋、百姓が集団で生活していた <p>○C村の役者と、それ以外の人々の生活の違いは何でしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・役者は各地の巡業を行い、村にいないこともあった 	<p>○これまでに学習した百姓村を想起させることで、共通点 (村に住み、農業を営む) に気づかせる。</p> <p>○ある日のC村の様子 (旅まわりの様子) をもとに、役者村の役者は、集団で移動しながら、巡業を行っていたことに気づかせる (渡世集団)。</p>	<p><u>資料12</u> C村に住む人々の割合 (出典：『加西市史』第6巻)</p> <p><u>資料13</u> ある日のC村の役者の様子 (出典：兵庫県歴史博物館『播州歌舞伎』)</p>
<p>4 芸能に携わる人々の身分を考える。</p> <p>○「さがりでなけりゃ」という言葉から、C村の役者について、どのようなことがわかるでしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特殊な才能をもっていたから、皮革の仕事をしていた人のように差別をされていたかもしれない 	<p>○俗謡の「さがりでなけりゃ」の意味を考えさせることで、憧れの対象とされつつも差別されていたことに気づかせる。</p> <p>○「芸能の仕事をめざす人はいたのだろうか」「どのように技能を継承していたのだろうか」と問うことで、現在と異なり、血縁集団、地縁集団であったことに気づかせる。</p>	<p><u>資料14</u> C村にあった座の記録 (出典：『加西市史』第6巻)</p> <p><u>資料15</u> 役者村についての記事 (出典：『大阪朝日新聞』1908年9月13.14日)</p> <p><u>資料16</u> C村に伝わる歌 (俗謡) の一部 (出典：『大阪朝日新聞』1908年9月13.14日)</p>
<p>5 本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・江戸時代に歌舞伎に対する人気は全国的に広がっていたけど、芸能に携わる人は差別されていたことがわかった ・人とは違うということが差別の原因になっているのではないか 	<p>○本時の学習を次時の学習へとつなげるために、現代の芸能に携わる仕事と比較して考えたことも表現させる。</p> <p>◇芸能に携わる人々のくらしについて、次のことを理解できているか。</p>	
芸能に携わる人は、町や村に住み、巡業をして芸能を披露していた。人々を楽しませる仕事をしていたものの、くらしの中で差別を受けていた		

【第 3 時】

① 本時の目標

○芸能は昔も今も民衆を楽しませ、人々の生活に欠かせないものであったことを理解し、芸能に携わる人々の身分について調べようとする意欲をもつ。

② 展 開

児童の活動	指導上の留意点（◇評価）	備考・資料
1 芸能の種類など、前時の内容を振り返り本時の課題を知る。 ・能や狂言 ・歌舞伎	○芸能に携わる人々の現在と過去の意識の違い（ギャップ）をもとに課題を設定し、学習に対する意識を高める。	
なぜ、芸能は人気があったのに芸能に携わった人々は差別されたのだろう		
2 差別の原因は何かを振り返る ・生死に関わること ・自然の変化 ・不思議な力を持つ人 ・人間の力の及ばないことが起こることを避けた（遠ざけた）	○既習の知識（蝉丸、タタリ、河原者又四郎）を活用して、どのような人々が遠ざけられ、差別されていたかを思い出すように助言する。	
3 当時の芸能について考える。 A 芸能が行われた場所 （1）芝居町 ・芝居町は河原にあり、芸能は河原で行われていた （2）河原について ・河原は、人の生死に関わる場所であり、あの世とこの世の境目であると考えられていた B 芸能に携わった人 （3）河原者について	○資料17をもとに芸能が行われていた場所について話し合わせ、芸能が行われていた場所は河原であったことに気づかせる。さらに、資料18をもとに、当時河原はどのような場所であったのかについて考えさせる。 ○河原に住んでいた人々は河原者と呼ばれる差別された人々であり、河原者が芸能に携わっていたことに気づかせる。 ◇芸能に携わった人は、河原に住む河原者と呼ばれる差別された人々であった。河原はあの世とこの世の境目であり生死に関わる場所であると考えられていたので芸能に携わる人々は差別されたことを説明することができる（断絶）。人々は、昔も今も芸能を楽しみ民衆の生活に欠かせないものであることを説明できる（継続）。	資料17 洛中洛外図屏風（出典「佛教大学デジタルコレクション」） 資料18 歌舞伎空間に関する資料（出典『歌舞伎の空間論』） 資料19 中世京洛における勧進興行（出典『文学』1984年9月号） 資料20 鎌倉時代の河原想像図（出典：網野善彦『河原にできた中世の町』）
4 当時と現在の演劇に対する意識について考える。 ・昔も今も芸能を楽しんでいる	○差別を「継続と変化」の思考概念によって考察させ、断絶しているならば「なぜ断絶したのか」、継続していれば「現代に影響を与えている部分は何か」について考えさせる。	資料21 芸能の様子（出典：教科書資料）

【第 4 時】

① 本時の目標

○属性への「差別」について、現代社会に類似していること断絶していることは何かを問い、「継続と変化」を検討することを通して、断絶しているならば、現代社会でも起き得る「差別」ではなくなったのは何かについて考え、継続していれば、現代に影響を与えている部分は何かについて考えることで、差別や偏見を克服するための社会との向き合い方を自分の言葉で説明する。

② 展 開

児童の活動	指導上の留意点 (◇評価)	備考・資料
1 「差別」について自分の言葉で説明する。 ・生死に関わること ・不思議な力をもつ	○前時までの学習をもとに、特定の技能をもった人々や、病気や障害をもった人々が差別されていたことを確認する。	資料22 江戸時代の芸能（大黒舞など）（出典：国文学研究資料館HP）
特定の技能をもった人々に対する差別について考えよう		
2 特定の技能をもつ職業を想像し、共通している点を考える。 ・庭造り、手工業者、医療関係者など ・差別されていた人々は優れた技能で当時の社会や文化を支えていた	○教科書の記述をもとに、芸能以外の差別されていた人々の特定技能を調べさせることで、当時の人々のケガレ意識についての理解を深めるとともに、どの技能も優れた技術で社会を支えていたという事実気づかせる。	資料23 石庭造りに関する資料（出典：教科書資料） 資料24 江戸時代の身分制に関する資料（出典：教科書資料） 資料25 解体新書に関する資料（出典：教科書資料）
3 現在は、特定の技能をもった人々が差別をされる対象ではなくなった理由を考える。 ・きまりができた ・差別された人々が立ち上がった。 ・科学や医学が発達した ・職業や住む場所での決めつけを反省した	○差別の対象ではなくなった理由は何かを問うことで現代社会と対比させ、「属性への差別」の不合理性に気づかせる。 ○歴史上の出来事を批判させるのではなく、歴史上の人間の生き方や社会の在り方を多面的・多角的に考えられる資質・能力を育成する。	
4 過去の差別の事例から何を受け取るかを話し合うことで、差別や偏見を克服するための社会との向き合い方を考える。	○「属性への差別」という意識が現代の私たちにあるのかを問うことで、現代への影響や残存する差別意識を捉えさせる。「継続と変化」の分析視点から検討することを通して、断絶しているならば現代社会でも起き得る「差別」ではなくなったのは何か、継続していれば現代に影響を与えている部分は何かについて考えさせる。 ○本単元の学習から何を学べるのか、自分の言葉でふり返りをさせる。	

4. 学習の実際

(1) 第 1 時

① 町の人々のくらしについて話し合う

江戸時代の町の様子を知るために、前単元「江戸時代の身分」で使用した史料「熙代勝覧」を提示し、町にはどのような人がいたのか想起させた。次に、「熙代勝覧」と教科書の史料である「江戸図屏風」の「日本橋周辺の様子」と照らし合わせることで、2つの史料に共通した町の様子について話し合わせ、江戸時代の町は「にぎやか」で「活気がある」ことに気づかせるようにした。

- T: 「熙代勝覧」には、どのような人がいますか。
S: かごを担いで、魚を売っている人がいます。
S: お盆を肩に担いで食事をどこかに届けている配達員みたいな人がいます。
S: 駕籠を使って人を運んでいる人がいます。
S: まとめていうと、町人がいます
T: 町人とは、どのような人でしたか。
S: ものを売ったり、作ったりする人です。
T: 町人の他にはどんな人がいますか。

- S: 旅をしている人がいます。
S: 刀をさして、黒い着物を着ている武士がいます。
T: 武士とは、どのような人でしたか。
S: 城や町の治安を守る人です。
T: 教科書の日本橋周辺の様子も併せて見てください。この頃の町はどんな様子だったのでしょうか。
S: 人が多いです。
S: 旅人もいたから、いろんなところから人が来ているんだと思います。
S: 町全体が、にぎやかな感じがします。
S: 町に元気がある感じがします。
S: 町に活気がある感じがします。
T: そうですね。今日は、なぜ江戸時代の町は、このようににぎやかで、元気で、活気があったのかを調べていきましょう。

ここに示したように、児童は史料から江戸時代の町の様子を詳しく読み取ることで、なぜ、町に活気があったのかということについて調べようという意欲をもつことができた。

② なぜ、町に活気があるのか予想する

「なぜ、町に活気があるのだろうか」と発問を行い、その理由を予想させた。児童は外国が日本にもたらす品物や知識を例に挙げながら、諸外国との交流を要因にあげた。また、参勤交代等によって大名が長距離を移動することは、大名にとって様々な土地の様子を知ることができるだけでなく、全国の様々な場所でお金を使うため、そのような幕府の制度等に誘因があったのではないかと予想していた。

T：なぜ、町はこのように活気に満ち溢れていたのだと思いますか。

S：鎖国はしていたけれど、オランダと中国と朝鮮とはつながっていました。そこからどんどんいろんな品物や知識が入ってきていたと教科書に書いてあったから、めずらしい食べ物が町に入ってきて、みんながそれを食べるに町に来ていたんじゃないかな。

S：町には、物を売る人や、作る人も住んでいたと勉強したから、外国から入ってきたいろんな品物を、同じように作ってみたいと思った職人さんが多くいて、それを買いたいと思う人もいたから、多くの人が町に集まってくるんだと思います。

S：さっき見た「熙代勝覧」の史料にも、食べ物を運んでいる人がいました。外国から入ってきた食べ物を日本でも作って、売っていたのだと思います。

S：「熙代勝覧」に呉服物品々という看板がありました。（前の時間に、朝鮮から生糸や木綿を輸入したとかいてあったから）朝鮮の人も町に着物の材料を売りに来ていたのだと思います。

S：服を売る人も作る人も買う人も、みんな町に集まるっていうことか！

（中略）

S：江戸時代は参勤交代をしていたから、参勤交代の時に地方の大名たちがいろんな町を見る機会があったのだと思います。それで、美味しいものや珍しい品物が日本中にどんどん広まっていった、それを欲しいと思う人々が、町に集まるようになったのだと思います。

S：大名行列は江戸から遠い地域の大名ほど、とてもたくさんのお金が必要だったと勉強したから、大名行列でたくさんのお金が、町で食事をとったり、ホテルみたいなところで休んだりしたのだと思います。そんなたくさんのお金にご飯を食べさせたり、寝かせたり、着るものとかの世話をしたりしようとしたら、多くの人が町で働かないといけないと思います。ホテルみたいなものや、ご飯屋さんを作ろうとしたら、多くの大工さんが必要になってくると思います。

このように、児童はこれまでに学習した知識を援用しながら、考察を深めることができていた。

③ なぜ、町に活気があるのか話し合う

次に、教科書の資料である「江戸時代の主な特産物」「江戸の町人の人口の変化」「江戸のおもな交通」などの資料を提示して話し

合わせた。すると、江戸時代は日本に戦争が起こらず、人々が平和に暮らせるようになったから人口が増えたのではないかと、平和であるからこそ少しでもくらしが豊かになるようなことに力を入れることができたのではないかという意見が出た。

T：これは「江戸時代の主な特産物」を表した資料です。江戸時代には、いろんな地域で様々な特産物を作るようになりました。なぜ、特産物ができたのでしょうか。

S：教科書に、「百姓は進んだ道具を改良し、農作業を速く楽にできるようになった。農産物の生産を高めていった」と書いてあるから、農業が発展したおかげで、米や野菜や果物の生産力があがったのだと思います。自分たちの生活に必要な量以上のものは、例えば米だったら、お酒などの嗜好品等を作ることにまわすことができるようになったと思います。それが特産物になっていったのだと思います。

S：教科書に、「綿・なたね・茶などを作り、収入を増やす百姓が増えた」と書いてあります。主な特産物の資料を見ると、綿織物や茶等は、日本全国いろんなところで特産物になっていることが分かります。

S：教科書に「商人や村の有力者の中には、小さな工場を建てて、綿織物・酒・しょうゆなどをつくる者があらわれた」と書いてあるから、百姓が工夫して農業を行って生産力を上げて、その農作物を商人が加工して売買するというシステムが出来上がっていったんだと思います。

T：農業だけでなく、漁業の漁法も発達したようです。

T：幕府も藩もこの頃、特産物を作る産業に大変力を入れていたのですね。

S：幕府が力を入れたら産業はさらに発展しそう！

T：これは「江戸の町人の人口の変化」を表した資料です。

S：鎖国をしてから、急激に人口が多くなっているよ。人手が増えたら、ますます産業が発達して、町にいろんな特産物が運ばれてきそうだね。

T：これは「江戸のおもな交通」の資料です。

S：陸路も航路も整備されているよ。

S：各地で作られた特産物などが、大阪や江戸などの大きな町に集まってくるはずや！

S：江戸で売られていたものは、各地に広まっていったと思います。

S：江戸などの町に品物を運ぶ途中に優れた農機具なんかを見たら、その知識を地元を持って帰って真似するだろうから、さらに生産力が高まるね。

教科書の本文から、経済力では大名をしのぐ大商人が現れたことや、大名にお金を貸す町人が出てきたことを見つけた児童は、それまでの武士と町人との力関係とは違ってきただけで大変驚いていた。力をつけた町人は、町の運営にも大きく関わるようになったことを伝えると、武士と町人が住んでいる町が、町人にとって、どのように住みやすい町に変わっていったのか興味を抱いていた。

④ 本時の振り返りをする

本時の終末にワークシートを記入させた。以下に、その一部を示す。

○争いのない平和な世の中になったから、百姓も町人も生活の質を高めるようなことに力を入れることができるようになったのだと思う。交通が発達したのも、田畑が増えて生産量が上がったのも、人々のくらしが豊かになったのも戦争がないからだ。

○いろんな地域から町にいろんな人が訪れることで、さらに町は発展していったのだと思った。町に活気があるのは、様々な地域から様々なものが集まってきて、それを売買するからだということがよく分かった。百姓も町人も、それぞれが仕事を工夫して行い、努力したからぜいたくなくらしができるようになってよかった。

本授業は、町に活気があった理由を考えるを通して、それぞれの身分の中で生活の質を向上させるために様々な工夫や努力を行った点、陸路や航路などの交通網の整備が影響を与えた点を理解できた。導入で前単元の「近世身分」で使用した史料「熙代勝覧」を本授業で提示したが、一人一人が前単位とは違った多様な視点で熟思することができたので大変有効であった。今回主に提示した教科書資料は、児童にとって分かりやすく整理されたグラフや地図であった。当時の絵や写真などを提示すると児童の思考がさらに深まったと考えられる。

(2) 第2時

① 芸能(歌舞伎)について話し合う

江戸時代に広がった文化のひとつとして歌舞伎に着目し、当時の人々のくらしの中に「芸能」が根づいていた点から、本時のめあてにつなげるように留意した。

T: みなさんに3枚の浮世絵を見せましたが、共通してることは何でしょう。

S: 歌舞伎役者です。

T: そのとおりです。歌舞伎役者が描かれた浮世絵ですね。歌舞伎役者の浮世絵はたくさん江戸時代に描かれているのですが、どうしてこんなに歌舞伎役者の浮世絵が描かれたのでしょうか。

S: 当時はとても流行ったから。

T: なるほど。歌舞伎が流行ったんじゃないかなという意見が出ましたが、152ページに江戸で演じられた歌舞伎の様子の資料がありますね。何がわかりますか。

S: 劇みたいなことをしている。

S: ダンスや踊りをしている。

ここに示すように、児童は、歌舞伎役者の浮世絵をもとに、気が付いたことを交流することができた。児童の意見を確認しながら、「芸能に携わる人々は、どのようなくらしをしていたのだろう」という目標を設定した。

② 江戸時代の芸能の広がりを調べる

次に、芝居小屋の内と外の浮世絵の資料(左:江戸で演じられた歌舞伎の様子、右:歌川広重「東都名所芝居町繁栄之図」)を示すことで、多くの人で賑わっていたこと、「座」をつくって江戸の町を中心に演じられていたことに気づかせるようにした。

その後、歌舞伎の番付をもとに、大関や関脇の中の「江戸」「大坂」「京」という表現に着目させ、人気のあった歌舞伎座が江戸や大阪を中心とした町に存在したことに気づかせるようにした。さらに、「農村舞台の分布」について調べるとともに、村にも歌舞伎が広まった理由を考えることで、歌舞伎が町や村を問わず全国的に展開されたことを共有した。

T: ここまで村に広がったのはどうしてなんだろう。

S: 村でも人気で、流行っているから。

S: 歌舞伎を見た人が、見てない人に良さを伝えて広めていったと思います。

S: 町の人も村の人も歌舞伎のことを知って、自分たちも見たいから。

T: なるほど。そうか。自分の楽しみのために見に行ったのかもしれないね。

児童は、「農村舞台の分布」の資料から気づいたことを進んで発表するだけでなく、村に歌舞伎が広がった理由についても考えを述べるできていた。

③ 芸能に携わる人々の生活を調べる

ここでは、江戸時代に存在した村としてC村を想定し、資料をもとに芸能(歌舞伎)に携わる人々の生活について調べる活動を展開した。調べ活動を展開するために提示した資料は次の三点(「C村に住む人の割合」「ある日のC村の役者の様子」「C村にあった座の記録」)である。

「ある日のC村の役者の様子」の資料については、当時の様子をイラストで示しており、児童にとっても読み取りやすいものであったことから、「若い人から年寄りまでいる」「旗を持つ人がいる」など多様な意見が出された。また、資料の読み取りを交流する中で、教師の発問に対し、「移動しながら旅をして、いろんなところで公演をする」というように、資料(「ある日のC村の役者の様子」「C村にあった座の記録」)を関連付けることができていた児童もいた。

④ 芸能に携わる人々の身分を考える

最後に、C村に伝わる歌(俗謡)の一部である「C村さがりでなけりゃ、ついていきたい三代吉(C村の役者に)」を示し、「さがりでなけりゃ」の意味を考えさせることで、憧れの対象とされつつも差別されていたことに気づかせるようにした。児童は、これまでに近世身分制の学習を行ってきた。その中で、百姓や町人、武士だけでなく、差別されていた人のくらしについての知識を習得しており、今回はそれを活用し、「さがりでなけりゃ」の意味についても考えることができていた。教師の発問に対し、すぐに反応し、「差別があったのでは」と語る児童の姿から、これまでの学習の積み上げを感じ取ることができた。

T: 「C村さがりでなけりゃ」とはどういうことでしょうか。
 S: C村でなかったらついていきたいけど嫌だな。
 T: なるほど。この言葉は「C村ではなかったらいいのに」という意味。みなさんはどう思いますか？
 S: 差別…あまりC村の人を…。
 S: 差別っていう言葉か、何かタタリとか、そういうものがC村にあると思う。

⑤ 本時の振り返りをする

学習を終えるにあたり、本時の学習を通しての振り返りをノートに記入させた。その際、次時の学習へとつなげることを目的として、本時で学習した芸能に携わる仕事と現代の芸能に携わる仕事と比較して考えたことも表現させるようにした。

本授業における成果は次の2点である。一点目は、江戸時代の文化についての理解を深める内容開発を行ったことである。江戸時代の芸能に携わる人々の暮らしについて、村役者に焦点をあてることで明らかにする授業を開発することができた。小学校社会科において、芸能、特に歌舞伎については、町人文化の一つとして取り上げられ、その繁栄について知ることが目的とされることが多い。それに対し、本授業では、芸能（歌舞伎）を村の文化としても扱うことで、その理解を深められるようにした。

二点目は、本時の授業の目標に迫るための資料の妥当性について検討できたことである。特に、芸能に携わる人々の生活を調べる際に活用した三つの資料については、資料をすみずみまで眺めたり、読み取ったことを進んで発表したりする児童の姿が見られた。このことから、児童が無理なく読み取ることができるとともに、それらを関連付けることが可能であることが理解された。

本授業の課題は、芸能（歌舞伎）に携わる人、特に村役者の暮らしについて調べたり、その様子について解釈を語り合ったりする時間を十分に設けることができなかった点である。

(3) 第3時

① 前時を振り返り、本時の課題を把握する

まず、前時の学習を振り返り、芸能に関するイメージをもとに現在の芸能と過去の芸能の様子について考える活動を行った。そして、そのギャップによって本時の課題である「なぜ、芸能は人気があったのに芸能に携わった人々は差別されたのだろうか」を導く。その際に必要な知識としては、前時の内容である「芸能を行う人々は差別されていた」という知識を活用しなければならない。この意味において、前時の学習内容がしっかりと定着している必要がある。以上のことから、本時の導入で大切なことは、次の3点である。

- (ア) 過去の芸能を行う人々は、差別されていた。
- (イ) 現在の芸能は、華やかで憧れの職業である。
- (ウ) (ア) と (イ) よりギャップをもたせることによって、学習課題を探究する意欲を高める。

T: 前時は、昔の芸能のイメージをちょっと勉強したけど、今の芸能のイメージはどうか。
 S: 面白い。お笑い。
 T: それでは、昔は？ 昔はどうでしたか。

S: 盛り上がっていた。昔は活気があった。
 S: 今はテレビとかでいろんなところに出ている。巡業している人は少ないけど、昔は巡業が多かった。
 T: なるほど。それでは、「人」はどうでしたか。
 S: 差別されてる人とか…
 T: 昔は差別されていた。歌舞伎をする人、芸能に關係する人は差別を受けていたっていう現実がありました。今日は、なぜ、盛り上がって活気があってすごく人気があるのに、芸能に携わった人は差別を受けたのかというところについて勉強していきたいと思います。

導入においての教師と児童のやりとりを分析すると、児童は昔の芸能の内容、つまり歌舞伎や能を対象に、現在の芸能と比較していることが考えられる。そのため、現在の芸能の一つである漫才等の「芸人」に意識が固定され、一般的な芸能人の華やかでなりたい職という観点で授業が展開できなかった。その一方で、どんな人が芸能に携わっていたかについては、「差別をされていた人」というように前時の学習が活かされていた。以上から、先にあげたポイントの「(ア) 過去の芸能を行う人々は、差別されていた。」は達成できていたものの、「(イ) 現在の芸能は、華やかで憧れの職業である。」について十分深めていくことができなかった。そのため(ア)と(イ)のギャップが思うように生まれてこなかった点が今後の課題である。

② 差別の原因は何かを話し合う

ここでは、当時差別されていた人々がどのような理由で差別を受けていたかを振り返ることで、芸能に携わった人々と差別の要因となる事柄をつなげることが目標である。

T: 差別された原因って何だろう。今までの学習思い出して。
 S: 体が不自由。
 S: 特殊な才能がある。
 S: 動物とかを殺す仕事とか。
 T: 動物の生死に関わる仕事など差別をされている。差別の原因になったのですね。

児童は、これまで学習した知識を活用して差別の要因について発言することができていた。いくつかある差別の要因の中でも、人（動物）の生死に関わる事柄が出てきていることは、これまでの学習が定着してきている証左である。さらに、次の段階「③当時の芸能について考える」をより深めるために、これまで学習してきた「身分」を形成する三つの要素である「職・居住地・役」のうちの「居住地」をこの段階「②差別の原因は何かを振り返る」で取り上げる必要があろう。そのために、この段階において、差別されていた人々が住んでいた場所（河原）について学習を深めていく必要がある。

③ 当時の芸能について考える

ここでは、資料「洛中洛外図屏風」をもとに、当時芸能が行われている場所が河原であったことに気づかせることが目標となる。まず、資料を見て気づいたことを発表した。

T: 資料を見て気づいたことを発表して。

S: 家紋。何か橋もある。

S: 田んぼがあって、川があって町みたいになってるから、村だけ孤立している。

S: この橋の先に田んぼがあって、田んぼがあるってことは多分百姓とかが住んでると思うから。その先ずっと見ていくと、また橋があって、こっちにも橋があって村だけ孤立してるように見える。

T: 実はここに芸能が行われていたところがあるんです。

S: 一番端の所かな。大きいから。

S: 人が集まっている。

資料「洛中洛外図屏風」だけでは、芸能が行われていた所が「河原」であったことにまで気づく児童はいなかった。そこで、資料「歌舞伎空間に関する資料」を提示し、さらに芸能が行われていた場所について考えていった。

T: 読んでみます。「芝居町は現実にもそうであったとともにそれ以上に、川、橋、船と結び付いていた。芝居町は、江戸時代、川や水に深い関わりのある空間として人々に捉えられていた。多くの屏風に描かれていた芝居町は、川によって囲まれて区切られている。川に囲まれた芝居町へ船に乗り、橋を渡り、人々が集まってくる風景が描かれている」さあ、どこだと思いますか。

S: 人が集まっているし、あと川もあって。

T: ここには実は川があって、川の近くに平地になってる所があります。こういった土地のことを何というか知ってますか。

S: 河原だ！

T: このような芸能が行われていた河原は、江戸時代の人々にとってどのような場所だったと思いますか。

S: 楽しいところ。人気な場所。楽しくて、人々が交流できる。

S: 差別されていたから、この河原はタタリやケガレを洗い流す場所。

S: そんな楽しいとか、人気とか、交流できたりする所だけど、タタリを洗い流したりして、その洗い流した体で楽しい歌舞伎とかをしている所。

T: ということは、ちょっと普通場所とは違って、神聖なところ。なるほど。神聖な場所であったり、特別な場所であったりというようなイメージができますね。

河原についての知識が十分でなかったことや当時の河原についてイメージができないことから、芸能が行われていた所が河原であったことに結びつけることが難しかった。さらに、当時の河原がどのような所であったかについて、これまでの学習が浅く河原の知識が不十分であったため河原の神秘性にまで迫ることができなかった。そこで、中世河原の想像図を使うことによって、当時の河原についてのイメージ化を図っていった。

児童は提示した資料を検討することで、当時の河原に対するイメージを広げ、これまで学習した差別をされた人々の知識と結びつけ、河原の神秘性と差別をつなげていった。この点に関する知識は、

児童にとっては難しく、教師の補説が必要となる。さらに、差別されていた人々の職業を提示することで、居住地だけでなく力の及ばない神秘性についても差別の要因であることを意識させていった。

④ 本時の振り返りをする

最後に、過去と現在の芸能について考えることで、芸能は昔も今も人々の生活には欠かせないものであり、意識は変わりなく継続していることを気づかせた。

そして、差別を「継続と変化」の思考概念によって考察させ、断絶しているならば「なぜ断絶したのか」、継続していれば「現代に影響を与えている部分は何か」について考えさせることで、本時の課題に迫るように留意した。

(4) 第4時

① 前時を振り返り、本時の課題を把握する

前時までの学習を振り返り、特定の技能をもった人々や、芸能に携わる人々が差別をされていたことを確認した。また、これまでの学習の中で生まれた疑問を共有することで、学習への意欲を高めた。

T: 前回までの授業を振り返りましょう。

S: 歌舞伎などの芸能をする人は差別をされていた。

S: 河原という場所は、特別な場所であった。あの世とこの世の特別な場所だった。

T: これまでに勉強してきたことで、新しい疑問が生まれていますか。

S: 今はタタリをあまり信じていないけど、当時はタタリをすごく信じていて、それが原因で差別が起こっていた。

T: 前回の授業で、芸能の人が差別をされていたと勉強しました。この資料「舞々が演じた大黒舞」に描かれている人々は、歌舞伎役者ではありませんが、このように芸能を仕事にしている人々も、特定の技能をもった人々として同じように差別されていました。他にも、以前の授業で、蟬丸の事例をもとに、原因の分からない病気とか、障害に対する差別なども勉強しています。本日は、これらの勉強をもとに、特定の技能をもった人々への差別についてさらに勉強をしていきます。

② 特定の技能をもつ職業を想像し、共通点を考える

教科書の記述をもとに、庭師や医者など、芸能以外の差別されていた人々の特定技能を調べさせることで、当時の人々のケガレ意識についての理解を深めるとともに、どの技能も優れた技術で社会を支えていたことに気づかせる授業展開を行った。

特定の技能をもった人々への差別について学習をする際には、差別のきびしさや不合理だけに焦点を当てて授業をするのではなく、差別をされていた人々が社会や文化を支えていたという点についても認識させることが重要である。

T: 特定の技能をもった人々への差別について、芸能の人々を主に勉強してきましたが、他にも特定の技能をもった人々を思いつきますか。差別をされていたのは芸能の人々だけでしょ

うか。このことについて、教科書で調べてください。

S:教科書に、「このような石庭は、その頃差別されつつもすぐれた技能をもった人々によってつくられたといわれています」と書かれているから、庭造りの技能をもった人々も差別をされていたと思う。

S:「百姓や町人からも差別された人々がいたけど、すぐれた生活用品をつくったり、役人のもとで治安を守る役を果たしたり、芸能を伝えたりして、当時の社会や文化を支えました」と書かれている。

S:「解体新書を作る時に解剖をした人も差別をされた人々だ」と書かれている。

T:なぜ、これらの人々も差別されていたのでしょうか。

S:河原に住んでいたからかな。

S:生死にかかわる仕事をしていたからだと思います。

ここでは、差別された人々の努力や誇りある生き方が、当時の社会を支え、文化や医療の発展につながったことを確認した。

③ 本時の振り返りをする

過去の差別の事例から何を受け取るかを話し合うことで、差別や偏見を克服するための社会との向き合い方を考えさせた。「属性への差別」という意識が現代の私たちにあるのかを問うことで、現代への影響や残存する差別意識を捉えさせることに留意した。

T:特定の技能や住む場所への偏見が、差別のきっかけになっていました。このような意識は、現代の私たちにあるのでしょうか。（「とてもある・少しある・あまりない・ない」の四択で付箋を貼る）

S:意識はあると思います。まだ差別があるからです。

T:どのような差別があるのですか。

S:「コロナ差別」「男女差別」「人種差別」「不自由な人への差別」。

そして、本単元の学習から何を学べるのか、自分の言葉でふりかえりをさせた。

○私たちは、昔はどのように差別がされていたかを知り、どのように解決していったのかを学び、今の差別やこの世界において自分がどう取り組むかを学ばないといけないと思った。

○差別は昔からあり、今もずっと残っていて、差別が起きないようにすることや、自分から差別をしないということを学ばなければいけないと思った。差別は、自分と同じ人間と分かっているけど、それを認めたくないという思いがあるから差別をしてしまうのだと思いました。

○昔は、肉を扱う人や生き物を殺した人々、技術をもった人々への差別があった。今はコロナや人種差別がある。昔は、村の差別など、いろいろな差別があったけれど、今は昔に比べたら差別が減っているけれど、まだコロナ、人種差別、男女差別、不自由な人々への差別などが残っているから、そのような差別をなくせるようにしていきたい。

○科学や医学が発達して、原因が分からなかったものが分かる

ようになっていっても、差別が残っている。まだ完全に差別がなくなっていないことを知る。人は全て同じ。人々が病気のことが分からないという不安が少しでもあると、その病気の人を怖がってしまう。

本授業終末部分では「特定の技能や住む場所への偏見が差別のきっかけになっていた。このような意識は、現代の私たちにあるのだろうか」と発問を行い、意見（立場）を明確にするために付箋を活用するアクティビティを行った。その結果、子供たちの意見は全員「とてもある・少しある」という結果であり、現代にも差別があること（コロナ差別や男女差別、人種差別など）がその主な理由であった。これまでに学んできた「みなす差別（属性への差別）」への言及がなかった点は課題として残った。このことから、年表等を活用して「継続と変化」を視覚化することが大切であったと考える。

5. 成果と今後の課題

本研究における実践を踏まえ、成果と課題を敷衍する。

（1）第1時

導入では「熙代勝覧」を提示し、町の様子について発問したことで、どのような人々がいたのかを確認し、活気があることに着目できていた。一方、次の発問「なぜ、活気があったのか」について「いろいろな物を売っている（から）」「店が多い」「平和そう」と答えるなど、可視化できる絵面についての気づきが出るに留まっていた。この学習場面では、「なぜ、にぎやかなのか理由を考えてください」と問うなど、にぎやかな条件について考えさせることで、描かれた状況の類推が可能となろう。江戸に人や物が集まっていたから産業が成り立っていた点、参勤交代など全国から武士が集まっていた点など、江戸時代の武家政権（幕藩体制）の構造や特産物が全国から集まっていたこととの関連まで理解が可能となったであろう。こうした条件を問う発問が社会の構造（仕組み）を理解する手がかりとなることが示唆された。

一方、各地から人や物が集まることでどのような現象が生じたのかについて、「町人が利益を得られた」など、産業が発達した影響について回答することができていた。活気と町人の繁栄との関連付けに成功していたといえる。

（2）第2時

歌舞伎上演中の図、歌舞伎小屋の外の様子を示したことで、「にぎやかな町（江戸）」と関連付けて芸能の広がり、授業者が意図するところの芝居が根づいていることへの気づきが生じていた。児童は座に掲げられた看板、集団で演じていることを発言し、にぎわいを受け止めるだけの集団がいたことにも気づけていたところから、芸能に携わる人々の属性が理解できていたことが示唆される。

次に、江戸の歌舞伎の様子と村舞台とを対比的に捉えさせたことで、町・町人だけではなく村・百姓にとっても芸能が広く行き渡っていたことに気づかせることに成功している。特に、農村舞台の分布、ある日の役者村の様子が有意味に関連付けられ、にぎやかでない村でも生業が成り立つことへの類推、納得ができていたこと

が観察された。さらに「どうして歌舞伎が村にも広がっていたのだろうか？」との問いは町人だけではなく百姓にとっても歌舞伎が受け入れられ、人気を得ていたことが理解される手がかりとして有効であった。

(3) 第3時

授業冒頭で「今の芸能のイメージ」を問う問いを立てていたものの、児童の反応は停滞していた。前時において、過去の芸能について学んでいたことが直ちに現在の芸能に置き換えることが困難であったことが示唆される。前時で取り上げた資料、例えば資料「芝居小屋の様子」を提示し、「過去は芸能が差別されていたこと」を想起させることが有効であろう。

次に資料「洛中洛外図屏風」から芝居小屋の立地に着目させることで、芸能が行われていた場所は河原であったことに気づかせることに成功している。次いで「河原が葬礼の地であったのはいうまでもなく、彼岸と此岸の接点である」ことに着目させたことで、河原は人知が及ばない特別な場所であったことへの気づきを誘引させていた。さらに児童の発言「こわい感じがする」「気持ち悪い」など情緒的な見解を取り上げたことで、「不思議・不安があるところ、特別な能力を持っている人が差別された」ことが導き出せていた。

芸能が行われている場所について過去と現在とを対比的に捉えさせたことで、差別に関わる「継続と変化」に着目できることがうかがえた。ただし、なぜ差別されるのかについて、「身体が不自由だから」など、見た目である表象や現象を述べるに留まっていた児童も見られた。

(4) 第4時

導入において本時の問いを「はてな」として取り上げ、前時の学習課題であった芸能と関連付けたことで、芸能に携わる人が特殊な技能を持っている「人」だから差別されていたのではないかとの類推を促していた。「人」への着目は差別の対象について属性から明らかにできるという意義がある反面、どのようなときに差別が起きるか、状況の面から現在でも起き得る差別についての一般化(概念化)は形成されにくいことが指摘できよう。

授業は「人」を手がかりとして、芸能に携わる人、庭造りをしていた人、優れた生活用品を作る人、治安を守る人にかかわる差別を取り上げ、「納得できるか」と問い直しをしたことで、児童には「技能を持っているのに差別されるのはなぜ？」と差異を問う問いづくりに結びついていた。問いを解決する探究的な活動が醸成されていたといえる。一方、やはりこの場面でも差別が起きる状況の一般化には関連付けられていない。一般化・概念化を促す手がかりが必要であることが示唆された。

差別に関わる度合いを黒板上に可視化させた「判断メーター」を導入することで現代でも差別が残っているかどうか、判断内容を可視化し、なぜ差別が「ある」「ない」それぞれの判断内容を吟味することに成功していた。他者の見解を聞き、判断結果を再考させたことで、判断内容の内省と脱構築(一般化)が引き起こされていた。

まとめでは、「差別の歴史を勉強してきて私たちが学ばないといけないことは何か？」を問い、差別に対する各々の向き合い方を問

い直すことを求めている。それに加えて学習してきたことを年表化する、差別を解消する視点は何かを問い直すことで、差別に向き合う私、社会の双方について振り返ることができたのではないだろうか。

(5) 本授業開発の意義と課題

本授業開発の意義として、以下の2点が明らかとなった。

第一に、導入時において江戸時代の町の活気についての理解を深めるために、町の様子や人々の活動に焦点を当てて授業を展開し、江戸時代における生活の諸相の理解を促し、当時の文脈(以下歴史的な文脈)をふまえることができたことである。この展開は、続く学習展開である、歌舞伎という芸能が町だけでなく村にも広がっていたことを通じて芸能が社会全体に及ぼした影響について考察する際、芸能が歴史的にどのように差別されてきたかについて明確化できた点につながっていく。歴史的な文脈を踏まえることは児童による差別を見抜く手がかりはあくまでも現代の視点からであることに留意することに他ならない。歴史的な文脈における状況を踏まえることは、いかに不当なのかをより「真正に」判断できる手がかりとなることが確認できた。

第二に、過去の芸能と現在の芸能のイメージを比較し、芸能が歴史的にどのように差別されてきたかについて考察するなど、芸能が行われていた場所やその社会的意味について学ぶことが差別の歴史についての理解を深める手がかりとなる点である。芸能に携わる人々が差別されていた理由や、差別がどのように継続し変化してきたかについて取り上げることは「ある属性」に焦点を当て、差別の実際を深く学ぶことを意味する。よって、現代社会における差別の問題についても考察し、差別に対する自分たちの向き合い方について深く考える手がかりが得られることが確認された。

総じて、芸能に携わる人々を事例に、歴史的な視点から児童に社会の構造や文化の変遷を理解することを促し、マイノリティの人権問題としての差別の不当性を捉え、現代社会とも関連付けて差別を解消するための手がかりが提供できた。また、差別の歴史を学ぶことで、私たちがどのように差別に向き合うべきかについての自己反省を促すことになることを明らかにした。

一方、差別に関わる資料提示を重視したこと、一部時系列に沿った資料が提示されず、時期の認識に混乱をきたすこと、差別に関わる「継続と変化」を明らかにする過程では、なぜ差別されるのかについて、「身体が不自由だから」など、見た目である表象や現象を述べるに留まっていた児童も見られた。「なぜ見た目で差別するのか」と問い直すなど、現代社会にも連なる差別の根源、みなすことで生じる差別に気づかせていく学習を組み入れることが必要であろう。

註

- 1 令和2年度版小学校社会科教科書、および、教師用指導書(教育出版・東京書籍・日本文教出版)における近世身分に関する記述、その授業展開の分析・検討を行い、近世の役負担が「支配-被支配」の関係に限定されることなく、広く近世国家の身分成立要件として捉えられるべき点、身分成立と差別強化を一元的に捉えるのではなく、18世紀の転換期における社会的背景をもとに

差別を把握する点の重要性を指摘した(和田幸司・山内敏男 a「近世身分を取り上げた歴史学習の諸課題—令和 2 年度版小学校社会科教科書〈6 年〉の検討を通して—」〈『姫路大学教育学部紀要』第 14 号, 姫路大学教育学部紀要編集委員会, 2021 年)〉。また, こうした課題を克服するために, 17 世紀後半から 18・19 世紀にかけて, 「役者村」と呼ばれる芸能者集団の成立と発展, その歴史的意義についての授業開発に取り組みを進めた(和田幸司・山内敏男 b「『みなす』差別と向き合い, 看破する児童・生徒の育成を目指す授業開発—小学校歴史単元『江戸の社会の変化と人々』における『役者村』の成立と発展を事例に—」〈『姫路大学教育学部紀要』15, 姫路大学教育学部紀要編集委員会, 2022 年)〉。さらには, 中世身分を学習対象として, 小学校 6 学年社会科「不安やおそれから逃れることの何が問題か: 平安から室町時代の社会と人々」の授業開発を行った。政治的・制度的に編成された近世身分制で完結してきた従来型の授業実践ではなく, 政治的・制度的な編成を前提としながらも社会動向を踏まえた中世から近世の体系的な授業開発を行うことをねらいとしている(和田幸司・山内敏男・小林智美・岩本剛・長川智彦・田村由宏「『みなす』差別と向き合い看破する児童・生徒の育成をめざす授業開発—小学校社会科『不安やおそれから逃れることの何が問題か: 平安から室町時代の社会と人々』〈6 学年〉の検討を通して—」〈『姫路大学教育学部紀要』16, 姫路大学教育学部紀要編集委員会, 2023 年)〉。

- 2 前掲註 1 論文, 和田幸司・山内敏男・岩本剛・長川智彦・川崎和俊「小学校社会科『江戸時代の身分』(6 学年)の授業開発 II—被差別身分へのアプローチを中心として—」(『姫路大学教育学部紀要』13, 姫路大学教育学部紀要編集委員会, 2020 年), 和田幸司・山内敏男・岩本剛・長川智彦・吉田一恵「中学校 3 学年『中近世の社会とケガレ』の授業開発」(『姫路大学教育学部紀要』12, 姫路大学教育学部紀要編集委員会, 2019 年), 和田幸司・岩本剛・柿本亜津子・有吉理恵「小学校社会科『江戸時代の身分』(6 学年)の授業開発」(『人権教育研究』19, 日本人権教育研究学会, 2019 年)。ブックレットとして, 和田幸司「『近世身分』授業デザイン小学校人権学習」(姫路大学健康・教育実践研究センター, 2023 年)がある。
- 3 和田幸司『浄土真宗と部落寺院の展開』法蔵館, 2007 年。
- 4 和田幸司『近世国家における宗教と身分』法蔵館, 2016 年。
- 5 和田幸司「『部落寺院制』論への疑問: 播磨国加東郡部落寺院を中心に」(『法政論叢』38-1, 日本法政学会, 2001 年), 同「近世身分の種族的特質—『火打村一件』を中心として—」(『政治経済史学』589, 日本法政学会, 2016 年)。
- 6 和田幸司「近世被差別寺院上寺の寺号移転と社会的差別」(『政治経済史学』617, 政治経済史学会, 2018 年)。関連する論文として, 柴田一「近世職人社会の差別観念—『上下』観念と『浄穢』観念—」(『吉備地方文化研究』12, 就実女子大学吉備地方文化研究所, 2002 年), 左右田昌幸「金福寺の『略系図』をめぐる」(頼富本宏『マンダラの諸相と文化 下』法蔵館, 2005 年)などがある。
- 7 深谷克己『江戸時代の身分願望—身上りと上下なし』(吉川弘文館, 2006 年)。

- 8 文部科学省 HP 2024/08/16 確認。https://www.mext.go.jp/content/20211025-mxt_syoto01-000018591_03.pdf
- 9 前稿(前掲註 1 和田・山内・小林・岩本・長川・田村論文)で指摘したように, 2023 年「人権についての姫路市民意識調査結果報告書」では同和問題の認識についての設問で, 「明らかに差別がある」「どちらかといえば差別がある」と回答した人の割合は結婚差別 21.7%, 土地差別 41.4% となり, 前回調査とは大きく異なる状況を示している。「同和地区や同和地区を含む小学校区にある物件を避ける理由」と問う設問では忌避意識が 33.8% みられる(「人権についての姫路市民意識調査結果報告書」(姫路市, 2023 年))。
- 10 前掲和田・山内 b 論文。
- 11 『加西市史』第 6 巻(加西市, 2007 年) 205 頁。
- 12 石瀧豊美「福岡県における『解放令』布達をめぐる」(『部落解放史ふくおか』39, 福岡部落史研究会, 1985 年), 古文書研究会「近世民衆史の泉 19」(『部落解放史ふくおか』74, 福岡部落史研究会)。
- 13 柳田國男『定本柳田國男集』第 9 巻(筑摩書房, 1969 年) 387 頁。
- 14 畑中敏之「『身分制度』『身分制社会』と言う勿れ」(『佐賀部落解放研究所紀要』40, 佐賀部落解放研究所, 2023 年) 5 頁。
- 15 例えば, 寺木伸明氏は身分差別の形態に「忌避」「制限・不利な扱い」を入れるべきだと主張している。筆者らの研究グループでは身分を構成する要素を近世史研究の成果をふまえて「職分」「役負担」「社会集団」としてはどうかと議論をしている。また, 「種姓観念」をどう位置付けるかも重要であろう。
- 16 星瑞希・小野創太・松村一太郎・渡邊和彦「現代社会における歴史論争問題に取り組むための授業構成—セイシャスらの『歴史的思考プロジェクト』に着目して—」(『社会系教科教育学研究』32 号, 社会系教科教育学会, 2020 年)。